

かきねの戸

昔むかし、あるところに、にいさんと妹がいました。

ある日のこと、おかあさんがよそへ出かけることになりました。おかあさんは、子どもたちにもたちにいいました。

「おまえたち、おかあさんはこれから出かけるけど、しっかりおるすばんしていてね。

かきねの戸にはくれぐれも気をつけるのよ」

おかあさんは、どろぼうが入ってこないように、かきねの戸に気をつけなさいといったのです。

おかあさんが出かけてしばらくすると、子どもたちはたいくつになってきました。そこで、にいさんが、

「ねえ、森へ行って少し遊んでこようよ。かきねの戸は持っていけばいいだろ」といいました。妹はよろこんで、さっそくふたりでかきねの戸をはずすと、それをだいに持って、森へ出かけていきました。

子どもたちは、森の中をかけまわって遊んでいるうちに、道にまよってしまいました。あたりはだんだん暗くなり、今夜はもううちに帰れそうにありません。ふたりは、おそろしいけものに食べられるのではないかと、こわくなってきました。そこで、大きなかしの木に登って朝になるのを待つことにしました。子どもたちは、かきねの戸をだいに持って、木に登っていきました。

ふたりが木の上でじっとしていると、まもなく、どろぼうたちが大きなふくろを引きずってやって来ました。そして、かしの木の下まで来ると、ふくろをあけて、ぎっしりつまったお金を数えはじめました。

ふたりは、どろぼうに気づかれないように、木の上でじっとしていました。

しばらくすると、にいさんが妹にささやきました。

「おしっこがしたい。もうがまんできないよ」

妹は、

「そう。じゃあ、したらいいじゃない」といいました。にいさんは、木の上からおしっこをしました。木の下のだろぼうたちは、

「おや、雨がふってきたぞ」といいました。そして、またお金を数えつづけました。しばらくすると、また、にいさんがささやきました。

「ねえ、うんこがしたい。もうがまんできないよ」

「そう。じゃあ、したらいいじゃない」

にいさんは、木の上からうんこをしました。どろぼうたちは、

「くそ。鳥のやつ、頭にふんをひっかけやがったぞ」といいました。そして、やっぱりお金を数えつづけました。

木の上の子どもたちは、じっとしずかにしていました。しばらくすると、また、にいさんが妹にささやきました。

「このかきねの戸、重くてもう持つてられないよ」

「そう。じゃあ、手をはなしたらいいじゃない」

にいさんは手をはなしました。かきねの戸はどろぼうたちのまんなかに落ちました。

「うわあ。かみなりが落ちてきたあ」

どろぼうたちはそうさげぶと、大あわてでにげていってしまいました。

朝になりました。にいさんと妹は木から下りて、かきねの戸をだいにひろいあげました。そして、どろぼうたちがおいていったお金をぜんぶひろいあつめて、うちへ帰りました。

うちに帰ると、おかあさんが、ふたりをしかったです。

「おまえたちが、かきねの戸に気をつけなかったから、どろぼうに入られてしまったよ。

うちの中のものがみんなぬすまれてしまったんだよ」

けれども子どもたちは、森の中でどろぼうに出会ったこと、そして、どろぼうがほったらかしていったお金をぜんぶ持つてかえってきたことを話しました。おかあさんは、大よろこびしました。

そして、そのお金で、テーブルやら着物やら食べものやらを買いました。それでも金はまだたっぷりあまったので、おかあさんとふたりの子どもは、一生楽にくらすことができましたとき。

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界のメルヒェン図書館』小澤俊夫訳／ぎょうせ

